

室町の歴史観

——『碧山日録』をめぐる——

名畑 崇

蓮如の時代、人ほどのような自己認識に立っていたか。ここで歴史観というのは、現実を過去に返して読むという、自己認識の一つの尺度ほどの意である。蓮如は寛正元年（一四六〇）『正信偈大意』を著し、翌年『御文』の制作を開始する。おりしも飢饉が起り、洛中で二カ月に八万二千人もの死者が出ていた。そのころ東福寺の一隅に住した太極（一四二一―八六？）の日記『碧山日録』に記すところである。太極はそうした現実を日記に書き留め、それをどう受け止めるか、過去の事跡にたずね、自己認識の一つの拠り所にしたようである。その辺りを『碧山日録』を通して伺ってみたい。ついでに『碧山日録』より約二〇年前、伏見宮貞成親王の日記『看聞御記』では、洛中に起きる様ざまの事件や異変を書き留め、それらを「併天魔所為」「天魔障碍」「天狗所行」「不思議也」「盛者必衰之理」などと慨嘆する。この時期におよぶと、従来ありえないような事象が多発するが、事の起きるまま、すべて天魔や天狗のなせるわざで「時節到来」なのである。貞成親王は出家していたものの、今という時は、過去に例がなく不可知で抗しようのない負の力が支配する時節の到来であった。

さて『碧山日録』と記主・太極の伝については、玉村竹二『碧山日録』記主考（『日本禅宗史論集』下之二）および益田宗「解題」（『増補続史料大成・碧山日録』）にくわしい。太極は

聖一派の桂昌門派に属し、古源邵元の系譜に連なり、東福寺内の靈隱軒に居し、住処を「碧山佳処」と自称した。俗系は近江の守護京極氏の支族佐々木氏と考えられている。出家して円爾弁円の流派に属し、顕密仏教をつく禅律僧であるが、五山に住持する官僧ではない。伏見宮貞成親王とは身分も立場も違う。

その点で『碧山日録』には、ありのままに現実をみ、歴史に徴し、自己の文体化してとらえるところがある。たとえば、寛正の飢饉で洛中の死者八万二千人と記し、惨状を具に描くとともに、史書や故実を通して事態を読みとろうとする。太極は仏教史に通じ、空海の事跡を慕い、南都仏教の故事に親しみ、夢窓疎石を敬った形跡がある。『碧山日録』に引かれる文献は『隋書』『高僧伝』『統高僧伝』『宋高僧伝』『仏祖統紀』はじめ、『日本書紀』『古今著聞集』『元亨釈書』におよぶ。以下『碧山日録』における文献や伝承の掲出例を示そう。

・寛正元年二月二十八日 「広録曰」として、善は則ち報づるに福をもつてし、悪は則ち報づるに禍をもつてすと記す。

・寛正二年二月二五日 飢饉に際し願阿が施粥したところ、なぜか粥を食した者が多く死ぬ。その理由は鍋を北向に干すゆえ不祥の風説あり。それを否定して「理あにしからず、ただ旧史を知ることあたわざる者の言なり」として、中国の故事を引く。

・寛正二年二月一七日 餓死者の遺体埋葬に従事する願阿とは、いかなる人か。彼は越中の人で生家は漁をしており、殺生の報いを聞かされ、出家して浄土教に帰したと知る。

・寛正二年三月五日 むかし嵯峨天皇の世に大飢饉があり無数の死者が出た。救済の方途について空海に勸問があったとこ

ろ、空海は人々の前生の業報の所感だとし、人民各自が「般若心経」を写して宿業を償うように勧めた。

・寛正二年四月一四日 「隋書」食貨志を引く。人民は内に役人が貢献を取り立て、外から盜賊に奪われ、饑饉で食がない。民は樹の皮葉をとり、藁を打って粉にし、土を煮て食う。物が尽きてしまい、人が食いあう。古と今を覩て嘆く。

・寛正元年三月九日 早魃のなか、河内から流れてきた老女が六条街で子を抱いて乞食し、子がいま死んだと泣き叫ぶ。太極は布施の残りを子供の葬料に与える。帰途に花見がえりの貴公子が輿に乗り、大勢の従者をしたがえて行くのに出遇う人々を威嚇し、酩酊・醉歌・嘔吐して通りすぎる。むかし飢饉に天子が減膳して人民に与え、公卿大夫も位階に応じて膳を減じた。飽食暖衣・爛醉狂歌して、凍えと飢えが自分より出ていることに気づかず、逸楽にまかせている。生々の報応は虚しからず。今日の花見の飲は、後世に「喪家の飢」となるだろうに。悲しいことだ。

・寛正二年四月二六日 西京で商人二人が居合わせ、粽二百枚を一人で一度に食べられる否か家屋・財貨・田畑を賭け、食べきれず賭けに負け財産を失う者がいた。飽くなき貪欲を世間では笑うが、諸侯・大臣が土地を争い、血戦して奪いあい、自分の利益を失うまいと鬪死する。それに較べると、粽を賭けるなど小さいことである。

太極には、事象を故事にたずね、ことさら「業報」や「報応」の理によって読みかえるところがある。生起する事象には善悪の報応の理がはたらくから、悪報と災禍を攘うためには、過去を知って未然に防止し、現在をつつしむ。すでに災禍が生じたばあい、

宿業または報応の原因をたずね、それを消去する措置をとる。これには仏法の効果が期せられる。「古史」や「旧書」に徴するところでは、貴人の傲慢と役人の刻剝に対する良吏の清廉と撫民を掲出する。飢饉を天の戒めとしてつつしむ「天子減膳」、飢民を傍らにみて飽食暖衣・爛醉狂歌する者に対する「後世喪家之飢」の批判、郡県の土地を争奪して血戦におよぶ諸侯・大臣への戒め等、いわゆる儒教的徳治主義の範疇に属するものである。

太極みずからの認識に即してみると、寛正の飢饉に際し、願阿らによる餓死者への施粥や埋葬・架橋を「大慈心」「菩薩の悲願力」とみ、願阿の身元を問うと、家の世業は漁師で、殺生の報いを怖れて出家し念仏門に入ったと聞き感嘆する。また嵯峨朝の大飢饉に、空海が勅問にこたえ、飢饉は人々の前生の「業報」の所感だとし、各人「般若心経」一本を書写せしめて「宿業」を償うべきだと勧め、空海が代表して罪業を懺悔すると、飢饉が治まったたと記す。歴史とは、太極において、応報の理を知り宿業を覚って懺悔・慈済をおしえ、治者には善悪の因果を示して傲慢をいましめ撫民をすすめるものとしてあった。その事例を自らの言説でとらえ「日記」に綴り、知己に示すところに太極の世界があったと言えよう。

蓮如は寛正二年はじめて書いた「御文」に「あなたがちに我身のつみの軽重をいはず」と記し、後に「無始眩劫よりこのかた、おそろしきつみとがの身なれども、弥陀如来の光明の縁にあふによりて、ことごとく無明業障のふかきつみとが、たちまちに消滅す」と人々に広く呼びかけるようになる。そういう蓮如の執り所は何だったのか。太極と対照して見えてくるものがあるように思う。